

おわってしまった夕暮れ

町田市立小山小学校 六年 長島^{ながしま}花歩^{かほ}

つりばし、あみ、かわ、ふねにまたあみ。うまのめ、かえる：

するっとほどけてしまったら終わり。それまでは終わりじゃない。崩れそうになっても。

「さて、もう日が落ちてきた。また明日。」

段々と暗くなる空の下、「あや」がほどけた。その時には、まほうの時間は終わってしまう。

彼女は、その不思議な紐をさっとうしまうと、走ってどこかに帰って行ってしまった。

彼女が行ってしまうのを見届けた瞬間。

夢が終わった。今から10年前、まだ幼い子供のころのことだっただろうか。ふたりであやとりをしていたあの短くて夢のような時間は、今まで思い出すことなく、忘れてしまっていた。「アヤ」と名乗ったその子は、私が田舎の祖母の家にいる夏の間だけやってくる。

そこであやとりをし、夏の終わりに「また来年」と言って去っていった。でも、先程の夢に出てきたあの日、それはやっぱり夏の終わりだった。あの日からアヤは来なくなり、翌年も、その次も、彼女は来なかった。夢を見た後、毎日あのことしか考えることができず、また夏がきた。もしかしたら、なんて想像もしたけれど、そんなくだらないことは考えたくない。

ある日、夏も終わりに近づいたころ。まるで秋のような風がふいている。久しぶりに部屋の片付けをすることにした。プリントや、漫画などを整理していくうちに、もう使わなくなったおもちゃが入っている箱に気づいた。その中には、ゲームのカードや、人形やらが詰まっていた。いろいろなものが詰めこまれた箱の中であふれかえているものたちの中に、不思議な雰囲気をもった小さな箱があるのに気づいた。見失わないように、そっと手に取って開けてみると、一本の輪になった紅色の紐が。どこか見覚えのある紐。これはあの日、アヤが最後において行ってしまったものだ。見つかってうれしいけど、見つけたくもなかった。というのは、アヤが残した手紙が原因。

「この紐はちよつとした時空移動ができる。これでひとりあやとりを続けてごらん。ただし、使えるのは一回のみ、使い終わったらただの紐。」これしか書いていないが、「使いたくもないのに不思議と惹かれる。手が勝手に使ってしまうそうで、今まで使っておいたのだ。だけどあの夢を見た後ではがまんでできない。好奇心にまけてしまい、紐を手にあやとりを始めてしまった。自分の力では止められず、だんだんと頭の中が空っぽになっ

審査員賞

長島花歩「おわってしまった夕暮れ」

ていく…

甘い、甘い金木犀の香り。まだ夏だというのに咲いている。目の前にはアヤ、二人であやとりをしているところへ。しばらく、ここに来た目的も忘れてあやとりに没頭していた。空はすでに朱色に染まり、アヤは立ち上がった。「もう終わりだよ。」そう言って、小さな箱を取り出す。「大事にしな。中の紙も無くさないで。」その箱を見て、はっと我に返った。去ろうとする彼女を引き止めなくては。

「待って。」と彼女の背中に呼びかけると、前にふみ出しかけていた足を止めてふり返ってくれた。「どうしていつてしまうの。ずっとこうしてたいのに。」勇気を出して問いかけてみた。「だって、それはしょうがないこと。綾ちゃん、あんたはもう成長した。じきにあたしには振り向きもなくなる。永遠に続くことはないんだ。」彼女が正しい。愕然としている間に、彼女は居なくなっていた。

突然、めまいがし、現実引き戻された。開けたはずのない窓から、すっかり秋になったような優しい風と共に子供たちの笑い声が聞こえてくる。耳元までに吹き抜けてきた風は、何かを私に伝えようとしているようだった。

審査員講評

匂いも温度もある物語。情景の豊かさが際立っていました。あやとりというモチーフの使い方が本当に丁寧です。ぐつと引き寄せられる書き出しと余韻たっぷりのラストに、たしかなセンスと技術を感じました。これからもきつと、読者の心に直接触れるような言葉を紡いでいく人なのだろうと思います。

—— 藤岡みなみ